



「うちゅう」30年

「月刊うちゅう」が創刊されたのは、今から30年前、1984年4月のことでした。今年度は「うちゅう」が30周年を迎えるということで、毎号でこの30年間の科学・科学館のできごとを振り返ってきました。

今回は「月刊うちゅう」30年の歴史を振り返ってみたいと思います。

「うちゅう」創刊

当時はまだ、大阪市立電気科学館の時代で、「うちゅう」は「星の友の会」発足とともにその会誌として発刊されました。創刊号の内容を見てみると、「ハレー彗星はどこから来たか」「空飛ぶ天文台あれこれ」「星はなぜ光るか」「わが国の天文学の黎明」といったタイトルが並び、主に天文学の話題が中心でした。有名な先生方の若い頃の写真や、既に亡くなってしまわれた方々の貴重な記事が数多く掲載されています。今も毎月紹介している「今月の星空」は、第1号から始まりました。ただし、当初は裏表紙に掲載されていました。



5周年記念号(1989/9)

大阪市立科学館開館

1989年5月31日、電気科学館が閉館となりました。この間も「うちゅう」は継続して発行され、「プラネタリウムのおい出」「四ツ橋と私」など、電気科学館を振り返る記事が掲載されています。インフォメーションの記事を見ると、友の会のサークルは現在の科学館が開館するまで、中央公会堂で開催されていたことが分かります。

10月7日の大阪市立科学館開館後は「科学館・展示場の旅」「これはすごい! 50cm望遠鏡」「さあ、地球をとびだそう!」と、新しい科学館の展示場・プラネタリウムの紹介が続きます。

この頃の連載記事としては、「一等星列伝」「天文工作・宇宙と遊ぼう」などのタイトルが見受けられ、1992年から2000年までは「星座八十八箇所巡り」と題して、全天の全ての星座が順に紹介されました。

この時代は天文学でも、1987年超新星からのニュートリノ検出、1990年ハッブル宇宙望遠鏡打ち上げ、1992年宇宙マイクロ波背景放射のゆらぎの発見、



10周年記念号(1994/7)



1995年太陽系外惑星の発見、1998年宇宙の加速膨張の発見、2000年すばる望遠鏡運用開始など、今でも大活躍する望遠鏡が作られ、天文学上の大発見が続いた時代でした。

友の会発足

1998年から、「星の友の会」と「サイエンス友の会」が合併して、現在の「友の会」が発足しました。それまで天文学の記事が中心だった「うちゅう」でも物理・化学の話題を扱うようになりました。サイエンス友の会から「ドキドキ実験室Let's Try」のコーナーが引き継がれ、毎号1つずつ元素を紹介する「周期表の旅」の連載も始まりました。「周期表の旅」は後に、「元素がわかる」(技術評論社)という本になっています。1999年からは、「窮理の部屋」「化学のこぼなし」の名称が登場し、現在まで続いています。

ジュニア科学クラブ発足

2000年には小学校5・6年生を対象とした「ジュニア科学クラブ」が発足し、「うちゅう」にもジュニア向けのページができました。ただ当初は、ジュニア会員に対しては別の冊子が作成され、「うちゅう」には「こどもの科学実験」の名称で、「レーウェンフックのけんびきょうを作ろう」「あきカンで虹を見よう」といった記事が紹介されています。翌2001年から現在のように「うちゅう」の中に「ジュニア科学クラブ」のページができました。

そして現在へ

2004年7月、20周年記念号が発行されました。科学館にゆかりのある30名ほどの方に記事をお寄せいただき、友の会会員さんからの投稿も多数掲載されています。改めて、「うちゅう」が多くの方に期待されていることを感じます。そして2009年からは、科学館を運営している大阪科学振興協会が発行主体となって現在に至ります。

ごく簡単に「うちゅう」の歴史を振り返ってみるだけでも、30年続いている冊子の重みを感じます。今後とも身近なところから最先端まで、科学を分かりやすく伝え、皆様の期待に応えられるような冊子を目指していきたいと思います。

江越 航(科学館学芸員)



20周年記念号(2004/7)